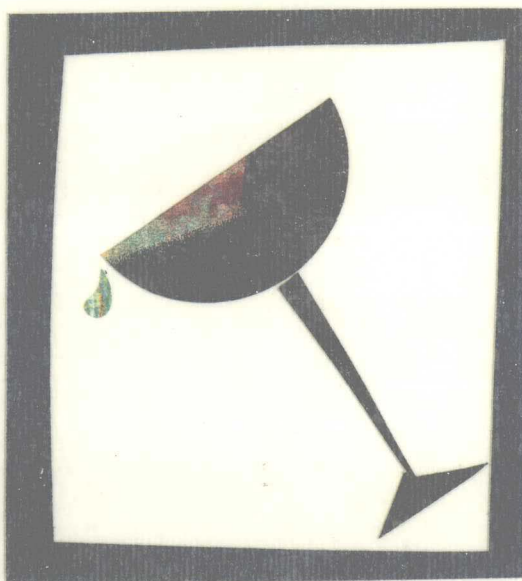


いい日カラオケ

井狩春男



井狩春男●いかりはるお

1945年埼玉県生まれ。中央大学第二文学部仏文科中退。取次会社(株)鈴木書店勤務。25年以上にわたり、仕入担当者として出版界を見つめ続け、書店向けの手書き新聞『日刊まるすニュース』の執筆・編集で、出版情報に独自のスタイルを確立した。新聞、雑誌、TV、ラジオと様々なメディアで活躍中。カラオケ好きが高じて書いた本書は本邦初のカラオケエッセイとなる。

●著書

『返品のない月曜日』(筑摩書房)

『本屋通いのビタミン剤』(筑摩書房)

『ベストセラーの方程式』(ブロンズ新社)

『文庫中毒』(ブロンズ新社)

『井狩春男書店』(モード学園出版局)

『本屋さんまで50歩』(ブロンズ新社)

『本を読んでもる金曜日』(日刊工業新聞社)

いい日カラオケ

著者●井狩春男

発行日●1994年8月17日初版

発行人●瀬戸忠信

編集人●瀬戸信昭

編集総轄●関根恵子

発行所●株式会社 日本ヴォーグ社

〒162-91 東京都新宿区市谷本村町3-23

電話●03-5261-5081(販売) 03-5261-5084(編集)

振替●00170-4-9877

印刷・製本●凸版印刷株式会社

©H.Ikari 1994 Printed in Japan

定価はカバー帯に表示してあります。

ISBN4-529-02568-3 C0095

JASRAC #49464010-401

©Copyright 1963 by WARNER CHAPPELL MUSIC FRANCE, Paris.

Rights for Japan assigned to SUISEISHA Music Publishers, Tokyo.

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製(コピー)することは、法律で認められた場合を除き、著作者及び出版社の権利の侵害となりますので、その場合には予め小社あてに許諾を求めてください。

乱丁・落丁本はお取替いたします。

井狩春男

いい日カラオケ

装幀・本文カット／水島一生

いい日カラオケ 目次



秋桜（コスモス） ● 山口百恵 13

夢一夜 ● 南こうせつ 15

17歳 ● 南沙織 17

噂の女 ● 内山田洋とクール・ファイブ 19

おもいで酒 ● 小林幸子 22

越冬つばめ ● 森昌子 24

上を向いて歩こう ● 坂本九 25

メリー・ジェーン ● つのだひろ 26

オリビアを聴きながら ● 杏里 29

君の名は ● 織井茂子 31

別れ ● 美輪明宏 32

グッド・ナイト ● 松尾和子 34

悲しい酒 ● 美空ひばり 36

赤い酒 ● 加山雄三 37

横浜たそがれ ● 五木ひろし 39

乾杯 ● 長渕剛 42

酒よ ● 吉幾三 45

DESIRE (デザイア) ● 中森明菜 48

グッバイ・マイ・ラブ ● アン・ルイス 50

雨の御堂筋 ● 欧陽菲菲 51

メケメケ ● 美輪明宏 53

北物語 ● 桂銀淑 56

そつとおやすみ ●布施明 58

別れ曲うたなど唄うたって ●前川清 61

俺は待ってるぜ ●石原裕次郎 65

別離 ●水原弘 67

M a m a s a y g o o d b y e ●尾崎豊 75

また逢う日まで ●尾崎紀世彦 77

心凍らせて ●高山巖 79

きれい? ●小沢なつき 83

池上線 ●西島三重子 85

黒い貝殻 ●水原弘 87

六本木心中 ●アン・ルイス 89

- アマン●菅原洋一&シルヴィア 91
- 『いちご白書』をもう一度●バンバン 94
- あの日に帰りたい●荒井由実 96
- 愛のメモリー●松崎しげる 99
- 恋人よ●五輪真弓 100
- 夜と朝のあいだに●ピーター 101
- 再会●松尾和子 102
- お久しぶりね●小柳ルミ子 103
- 千年の古都●都はるみ 106
- くちなしの花●渡哲也 109
- 雪の渡り鳥●三波春夫 110

北上夜曲 ● 和田弘とマヒナスターズ / 多摩幸子 112

時には母のない子のように ● カルメン・マキ 114

いかないで ● 金子由香利 117

風の子守歌 ● 五木ひろし 120

DREAMER ● 小比類巻かほる 121

東京アンナ ● 大津美子 124

雪の降る町を ● 高英男 126

想いで迷子 ● チョー・ヨンピル 127

夏の日の想い出 ● 日野てる子 130

悲しい色やね ● 上田正樹 131

無言坂 ● 香西かおり 133

Somebody's Night ●矢沢永吉 135

街の灯り ●堺正章 137

兄弟船 ●鳥羽一郎 139

哀愁波止場 ●美空ひばり 141

北の旅人 ●石原裕次郎 143

真夜中のギター ●千賀かほる 146

星の流れに ●菊池章子 186

あとがき 194

秋桜あきざくら

(コスモス)

●山口百恵やまぐちももえ



京葉線の南船橋駅の前に大きな大きな原っぱがあった。誰が種をまいたものか、あるいは野性のものであったのか原っぱ一面にはコスモスが咲いていた。それは見事なものだった。

色どりの花は、子供ならスッポリかくれるほどの高さで咲いていた。

母はオイラの家遊びにくるとき、コスモスが咲いているかどうかを京葉線の電車の中から確認し、帰りにオイラたち家族を連れて花摘みに南船橋の駅に降りたものだった。

ヘンケルの料理バサミはよく切れる。コスモスのかたくなるまで成長した茎を、母はバシンバシンと切っていった。

母の姿は、すぐにコスモスの中に隠れ、見えなくなった。ハサミの音と、時おりアツハという声が聞こえていた。キレイなのを見つけたのだろう。

花の間から出てきた母は、両手にかかえきれないくらいのコスモスを抱いていた。花屋ができる。なん回も入っていくものだから、オイラはコスモスを新聞紙で大きく

包むのにかかりきりだった。

束は、十近くできた。母はみやげにと持てるだけ持って電車に乗り込み、帰っていた。残ったコスモスは、オイラたち家族が持ち帰った。家中の花びんを集めても飾りきれない。バケツや鍋類にまで水を入れ、コスモスを分けた。台所は、原っぱが移動したかのようにコスモスで埋まった。

それから十年ほど経って母は亡くなった。原っぱのコスモスもいつの間にかなくなっていた。

先日、車を買換えた。こんどの車には、ステレオが標準で装備されている。前は、めんどうだったのでステレオは付けなかった。新車の匂いの中、オイラと女房は走りながらカセットをかけて愉しんだ。部屋から選んできたカセットをぎつしりボックスに入れてある。最近では、ほとんどがCDカレーザーカラオケで歌を愉しんでいたから、カセットは古いのしかない。「ふりむけばヨコハマ」がヒットした頃のマルシアのカセットをかけた。持ち歌が少ないから他人の歌を唄っている。山口百恵の「秋桜（コスモス）」が流れると、前半が終るころに、「マルシアって、ウマイわねえ」と女房がいった。オイラもそう思った。原則として、歌のウマイ人が人気になるなどあたりまえのことを思ってもいた。

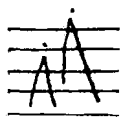
もうすこし あなたの子供で いさせて くださーい

そう、もう少しあなたの息子でいたかった。急にコスモスを摘む母の姿が目についた。母の話になった。車は家の近くの海岸を走っていた。海は、ウインドサーフィンをする若者たちでいっぱいである。

「お母さんが生きている時に、うちに車があつたらね。いろいろ連れて行ってあげられたのに」。女房はしみじみといった。オイラもそう思った。

突然に女房がいう。「あのコスモスねえ、誰が摘んでもヨカッタのかしら?」。オイラもそう思った。

夢一夜 ● 南こうせつ



女房が独身の頃、彼女は船橋の駅から歩いて三分のところにあるアパートに一人て暮していた。そこは、彼女の勤める幼稚園の先生方の寮代りに借りられていて、先生方はタダで住むことができていた。

オイラは彼女とつきあうようになってから半年ぐらい経って、初めて彼女のアパートに招待された。オイラはすっかり彼女にまいていて、こんなにも愛しちゃってイ